

しいむじな

2018・秋

62

特集

ヒガンバナ

暑さ寒さも彼岸まで、とはよく言ったもので、九月になっても居座っていた暑気も秋のお彼岸のころには秋の空気と交代します。それを待っていたかのように咲くのがヒガンバナです。燃え立つような赤い花が群生する景色は秋の風物詩です。しかし、市街地でこの花を目にすることはあまりありません。また、山奥の森の中に生育することもありません。つまりヒガンバナは都市と山奥の中間にあたる農村景観に生育する植物です。

日本人になじみ深い存在ですが、ヒガンバナは中国原産だと考えられています。それが日本各地に広く分布しているのはおそらく人間が意図的に運んだためです。なぜなら、ヒガンバナには種子ができず、球根でしか殖えることができません。土の中にできる球根は自力で移動することはできませんし、風に飛ばされたり鳥などの動物に運ばれることもまずありません。つまり、人が球根を運んで植えてやらなければヒガンバナが分布を拡げることができないのです。

そんなヒガンバナとはどんな植物でしょう？

(尾崎煙雄)

房総の山のフィールド・ミュージアムとは

清和県民の森を中心とした房総の山を舞台に、地域の自然や文化そのものを「資料」や「展示物」としてとらえる、千葉県立中央博物館が中心となっておこなっている新しい博物館活動です。観察会の開催、君津市立三島小学校の「教室博物館」開設に加え、地域の人々と協働で資料の収集や調査・研究等をおこなっています。

特集

ヒガンバナをよく見ると

ヒガンバナの花

たとえばユリの花には六枚の花びらと六本の雄しべと一本の雌しべがあつて、茎の先に数個の花が集まつて咲きます(写真①)。では、ヒガンバナの花はどんな作りになつていて、どうなつて咲くのか？



写真① ウケユリの花 (奄美大島産)

そもそも一本のヒガンバナにはいくつの花が着いているのでしょうか。一つだと思つていても、ヒガンバナの一本の茎には三つから八個の花が咲きます。一つの花には六枚の花びらと六本の雄しべと一本の雌しべがあります(写真②)。



写真② ヒガンバナの花の1つ

この組み合わせはユリの花と同じです。しかし、ヒガンバナの花びらは細長い上に強く反り返つていて、隣の花と絡み合うようになっています。そのせいで、ヒガンバナの場合には一本の茎の先に咲いた数個の花が全体として一つの花のように見えてしまうのです(写真③)。



写真③ ヒガンバナの花

種子のできない訳

表紙で「ヒガンバナには種子ができない」と書きました。それは、日本のヒガンバナがみな「三倍体」だからです。正確にいうと、三倍体のヒガンバナにもまれに種子ができることがあるのですが、その種子もうまく発芽することはまずないそうです。

我々ヒトの場合、誰もが母親から受け継いだ染色体一組と、父親から受け継いだ染色体一組を持つています。このように両親から受け継いだ計二組の染色体を持つ生物を「二倍体」といい、有性生殖をする動物の多くは二倍体です。ところが、三倍体の生物は染色体を二組ではなく三組持つています。三組あると、正しい数の染色体を持つ卵子と精子(植物では卵細胞と精細胞)をうまく作ることができません。そのせいで三倍体のヒガンバナは受精してもうまく種子ができないのです。

ヒガンバナの球根

ヒガンバナの球根を切ってみると、内部は玉ねぎのような層状構造になつて、その中心がわがかります(写真④)。これは栄養を貯蔵する



写真④ ヒガンバナの球根

るために変化した葉が重なり合つてきたもので、「鱗茎」といいます。

この球根は豊富なデンプンと共に有毒成分を含んでいて、そのままでは食べられません。しかし、水に晒すなどの方法で毒を取り除けば食べることが出来ます。現在、ヒガンバナの球根を食べることはほとんどないと思われませんが、過去には飢饉の折にヒガンバナの球根で飢えをしのいだという記録もあります。このように、普段は食用にしないが食糧難の時に利用する植物のことを救荒食物といひ、ヒガンバナが日本各地に広まつた理由の一つとも考えられます。

ヒガンバナの葉

「花は葉知らず、葉は花知らず」という言葉があります。これはヒガンバナの生態をうまく言い表していません。

「ヒガンバナの葉っぱを見たことがありますか？」と質問すると、たいいていの人は「うーん、花は知つていますが、葉っぱってどんなだつたけ？」と答えに困つてしまいます。それもそのはずで、秋のお彼岸のころ咲き乱れているヒガンバナには「花茎」と呼ばれる茎とその先に咲く花しかなく、葉はありません。

一〇月になり花がすっかり枯れたころ、花茎の根元から葉が伸び始めます(写真⑤)。伸びてくる葉は七ミ



写真⑤ 花後葉(10月)

りほどの幅の細長い扁平な形で、二ラの葉に少し似ています。一二月には伸びきつた葉が青々と茂り、そのまま冬を越して、四月初めに枯れます(写真⑥、⑦)。このように、冬に葉を茂らせ、夏に葉を枯らしてしまふ性質を「冬緑性」といいます。多くの植物が葉を茂らせる夏を避けて競争相手の少ない冬に光合成を行う暮らし方を選んでるわけです。

冬緑性のおかげで、五月から九月の開花までの間は葉も花もなく、ヒガンバナは地上から姿を消してしまふのです。そしてお彼岸のころ、何もなかった地面から真っ赤な花が突然に姿を現すので、ひととき印象深く映るのでしよう。(尾崎煙雄)



写真⑥ ヒガンバナの葉(1月)
写真⑦ 枯れたヒガンバナの葉(4月)

コラム

房総丘陵の動植物(10)

ヤスデ

ヤスデもムカデも細長い体にたくさん足をもち動物ですが、みなさんはその違いをご存知でしょうか。

体のつくりで一番違うのは足の生え方です。ムカデは胴体の1つの節から2本の足が生えているのに対し、ヤスデは1つの節から4本の足が生えています(ただし体の前の方では2本の足が生えている節もあります)。

生態面での違いもいろいろありますが、最大の違いはその食性です。ムカデは生きた小動物を捕らえて食べる肉食性の動物で、毒牙を持っているので、種類と大きさによっては毒性が強いものがあります。特に房総で「ハガチ」と呼ばれるトビズムカデは、大きいものでは体長10センチメートル以上になり、これに咬まれると激痛がはしり、咬まれた部分はひどくはれ上がってしばらく痛むそうです(幸いにして私は咬まれたことはありません)。

これに対してヤスデは腐りかけた落葉などを食べるおとなしい動物で、毒牙もありませんから、人を咬むようなことは決してありません。

ヤスデは市街地でも石や植木鉢などの下でよく見かけますし、夏の初めごろ

に家の壁面や塀の上で群れているのをご覧になったことがある方もおいでしよう。ここでは市街地ではあまり見かけない、房総丘陵の森林に住んでいるヤスデを3種類、紹介しましょう。

オビババヤスデ(写真①)

ババヤスデのなかまは胴体の節の背中側がひさし状に横に張り出し、表面は滑らかで、美しい?種類が多いグループです。

オビババヤスデは体長40ミリメートルに達する大型のヤスデで、背中側はオレンジ色の地色に焦げ茶色の帯状の模様がある、大変美しい種類です。千葉県

内では清澄山、鹿野山、三石山など、南房の山地で確認されています。

長野県や山梨県などにはキシヤスデという種類があります。このヤスデは大発生してレール上を群れて歩き回り、その上を通った列車が、急勾配の場所ではつぶれたヤスデの体液で滑って動けなくなることから、この名前があります。オビババヤスデはこのキシヤスデのごく近縁なグループです(同種とする考え方も、別の亜種とする考え方もあります)。

千葉県レッドリストでは一般保護生物(Dランク)に指定されています。

トラフババヤスデ(写真②)

背中側が黄色と焦げ茶色の縞模様になっていて、なかなか渋い美しさがあります。この種は長柄町権現森で発見され、

1986年に新種として記載されました。権現森の他、県内では千葉市内の3箇所で見つかっていない、珍しい種類です。千葉県にしかないと思われていましたが、最近茨城県からも確認されました。

千葉県レッドリストでは最重要保護生物(Aランク)に指定されています。

アカヒラタヤスデ(写真③)

体長が20ミリメートル程度の細いヤスデですが、体色は息をのむような朱色ですので目立ちます。写真のように朽ち木やキノコに群生していることがあります。千葉県内では清澄山から記録されています。

千葉県レッドリストでは要保護生物(Cランク)に指定されています。(萩野康則)



写真① オビババヤスデ 体長約40mm。
2010年7月17日、鴨川市東町にて立川浩之撮影。

写真② トラフババヤスデ 体長約35mm。
2005年4月9日、千葉県若葉区加曽利町で採集、実験室で撮影。

写真③ アカヒラタヤスデ 体長約20mm。
2010年7月14日、東京大学千葉演習林(清澄)内にて尾崎煙雄撮影。

観察会報告

夏の山の昆虫

7月21日(土)と22日(日)の2日間、君津市清和の山で昆虫の観察会を行いました。1日目はライトトラップを使って夜の昆虫採集。少ないながらもクワガタやカブトムシも見つかりました。2日目の午前中は森の奥へ昆虫採集に出かけました。午後には研究員の実演による昆虫標本作り講座。参加者のみなさんは昆虫ざんまいの2日間となりました。(尾崎輝雄)



写真① ライトトラップの様子
写真② 昼間の森での昆虫採集

川の生きもの2,3

7月21日(土)(参加者33名)と8月18日(土)(参加者43名)に清和県民の森木のふるさと館近くの小糸川で川の生きもの観察会を行いました。どちらも川の水が少なく、子供たちは川の石をひっくりかえしながらドジョウ、オタマジャクシ、カワゲラなどいろいろな生きものをとっていました。

(岡崎浩子)



写真③ 「後藤先生、これ、な〜に?」(7月21日)

写真④ 「石の下にいるぞ!」(8月18日)

連載

小櫃川流域の生きもの クマゼミ ~北上する南国のセミ~

今夏の生きもの好きの打ち合わせ前のおしゃべり。「この頃、クマゼミの勢力が増したね。子供のころから鳴き声は聞いていたが」と海岸沿いに住む中年の方。「久留里ではクマゼミの鳴き声を聞きません」と中流域に住む方。猛暑のせいで思いがけなく、セミの話になった。

クマゼミは全長6センチをこえる日本最大のセミ。羽は透明で緑色の筋をもち、体は真っ黒。たっぷりとした体つきで虫好きには魅力的だ。北上する代表的な南国の昆虫でもある。

かつて、クマゼミが、旅行先の伊豆半島の公園で植木に大発生し、手でいくらかでも捕れた。しかし、小櫃川流域では鳴き声を聞くが、姿はほとんど見られない。たまたま、目の前のヤマザクラの枝に飛んできて止まり、すぐに鳴き出したので、双眼鏡で小枝をなぞるように見て探し出し、写真を撮った。



写真:クマゼミのオス
(2008年8月10日
木更津市清川)

さて、私が流域ではじめてクマゼミの鳴き声を聞いたのが、1975年頃の夏で、千葉県立木更津高校の裏山で2回聞いた。各1匹のみであった。当時は、西日本からの植木の土とともに卵や幼虫が入ってきて、一時的に発生したのか?と思っていた。しかし、約10年前から、複数鳴いている場所が現われた。数は少ないが、下流域の海岸沿いや市街地に定着しているに違いない。最近では、クマゼミの元気な鳴き声を聞かないと夏が来た気がしなくなった。だが、久留里などの中流域から上流域には定着しているのか?まだ、確かめていない。

参考文献 千葉県2002『千葉県の自然誌本編6』
(文・写真 千葉県立中央博物館ボランティア 成田篤彦)

MEMO

クマゼミ
カメムシ目セミ科 全長6~7センチ

分布は本州(千葉県以西)、四国、台湾など。卵で越冬。小枝に止まることが多い。小櫃川流域ではオスが7月中旬~8月下旬の午前中に主に鳴く。

しいむじなの由来



房総の山のフィールド・ミュージアムのニュースレターのタイトル「しいむじな」は、アナグマをさす房総丘陵の方言です。ムジナは地域によってアナグマやタヌキをさすなど様々なのですが、千葉県内ではアナグマのことが多いようです。房総丘陵の人々は、大きなスダジイの木のウロに棲んでいるムジナを、愛情を込めて「しいむじな」と呼んでいます。

小櫃川下流域の南国のセミ、クマゼミの話は、今夏の暑さを象徴しているかのようです。その暑い夏が過ぎ、ヒガンバナの季節になりました。ヒガンバナの開花は夏の暑さと関係があるそうです。(温暖化がすすんでオボンバナになったらどうしよう。)コラムに登場してもらったヤスデは、よく見ると大変美しい。そして汽車も止めちゃう(?)なんて、すごいです!

(岡崎浩子)

編集後記